

昨今の日常日本語に見られる現象、およびその日本語教育への含み

ハドソン遠藤陸子
ミシガン州立大学
endo@msu.edu

要旨

本稿では昨今の日常日本語の特色を述べ、その日本語教育への含みについて考察する。教師の任務は、「日本人」を育てることではなく、「本人希望のアイデンティティに相応しい日本語で意思疎通のできる人」を育てることだということには異論がないと思うが、様々の状況に合った言語使用の熟達者を育てるとするのは至難の業である。理想的には、現在だけではなく、将来社会人になった時に有益となる情報も与える必要がある。限られた時間内に、どのような日本語を、いつ、どのように教えるべきかなど、各々の現場で学習者に合った答えを模索する事が要求される。その為には教師は常に日本語の実態を観察し知識を蓄えておくという姿勢が大切である。本稿の主旨は、音声、表記、形態素、語彙、語用（特に敬語関連）のレベル別に代表的な新しい現象を一覧し、それらを調べる為の手軽なリソースを紹介することにある。

キーワード：新しい現象、教師の任務、昨今の日常日本語、日本語教育

1. はじめに

昨今の日本語は「乱れている」とよく言われる。しかし、これはいつの時代にも言われていることである。¹ 新しい用法を「乱れ」と見るか「変化」と見るかは別として、日本語教師としては学習者にどのような日本語を教えるべきか考える必要がある。教科書にあるからというだけの理由で、実際には誰も言わないような「模範文」を教える事は避けた（大野・ジョーンズ 2001 参照）。Hadley (1993) の「言語教育に関する暫定的 5 原則 (“Five Working Hypotheses”）」の一つとして、「学習者が遭遇するであろう状況に対処できるように、言語的にも文化的にも指導すること」の大切さが唱われて久しい。最近では、アニメ、ドラマ、J ポップスなどで自学自習する学習者が多くなり、また留学経験者も増えている。そのため、スラングや乱暴な言葉に詳しい学習者が多くいる反面、

過度に敬語を使用する上級者も現れ、どちらも教師としては気になる。我々の任務は、「日本人」を育てることではなく、「本人希望のアイデンティティに相応しい日本語で意思疎通のできる人」を育てることだということには異論がなかろうが、様々な状況に合った言語使用の熟達者を育てるとするのは至難の業である。理想的には、現在だけではなく、将来社会人になった時に有益な情報も教える必要がある。限られた時間内に、どのような日本語を、いつ、どのように教えるべきか（例えば、使えるように導くのか、聞いて分かれば良しとするのか）、各々の現場に合った答えを模索する事が要求される。その為には、また学習者にいつ質問されても困らないように、教師は常に日本語の実態を観察し知識を蓄えておくという姿勢が大切である。

本稿では昨今の日常日本語の特色を述べ、その日本語教育への含みについて考察する。以下に扱う現象すべてを学生に教える必要は全くない。暫くすると消滅すると思われるものもあるし、教えない方が混乱を避けられて却って良いというものもある。基本ができるようになってから徐々に周辺の知識を与えることは教育の第一原則である。しかし、教師としては言語の使用実態に精通し、言語に対して敏感であることが必要不可欠である。本稿の主旨は、音声、表記、形態素、語彙、語用（特に敬語関連）のレベル別に代表的な新しい現象を一覧し、それらを調べる為の手軽なリソースにはどのようなものがあるのかを紹介することにある

2. 昨今の日常日本語の特色

2.1. 音声レベル

音声レベルでの特色の一つは「ガ行鼻濁音 [ŋ] の衰退」である（井上 1998）。第二は単語のアクセントの「平板化」が多くなっていることで、アクセントによって言葉が区別される場合もある。例えば、「カレシ [低高高]」（単なる友人の男性）と「カレシ [高低低]」（特定の男性）では意味が異なる（陣内 1998）。また、バ

イク [低高高] など、ある種の外来語の発音に「専門家アクセント」という現象が見られ、「平板化することがその分野によく通じていることの目印」になり、その人たちの間に「仲間意識が育つ」(相澤 2001)。第三に、「半疑問」という現象がある。例文 (1) は井上 (1999b) からの引用である。

- (1) 犬?を飼ってるんだけど、散歩?が大変だね。やっぱり猫?の方がいいかな。

井上 (1999b) によると、半疑問は「本来は相手の理解度を確認するためだった」が、用法が広がり、「言葉の最後の発音をあげると相手が目をみてくれ、接触が保て、親しさが増すということもある」とのことで、「新型敬語」の一つと見られている。

かなり前になるが、NHKの「ナイトジャーナル」という番組で日本語の発音変化の特集をしたことがある。その番組で言語学者の城生伯太郎氏は、チをティ、ツをトゥのように発音したり、ラ行を通常の弾音 (flap) ではなく、“1”のように発音する若者が増えたと説明し、街頭調査で確認している。確かに、若い歌手がラ行を“1”と発音しているのによく遭遇する。その他、特定の母音の長音化もある。以下は筆者の作例であるが、このような若者の話し方をよく耳にする。

- (2) 太郎：それってえ、むずかしい～？

花子：てゆうかあ、色々あるのう。ムリなんだよねえ。だしい、今日はつかれたあ、みたいなあ…。

この種の例はカジュアル会話の練習に使っているが、学生は既にテレビや友達との会話で聞いていることが多いため、非常に喜ぶ。但し、半疑問や長母音化が他者にどう印象を与えるのかということにも触れる必要がある。

2.2. 表記レベル

最近の表記方法の特色に関しては、秋月高太郎 (2009) の『日本語ヴィジュアル系』が詳しい。本の帯にある「こんなかきかたでもべつにいいーちゃんっっ」は最近の特徴を如実に表している。つまり、小書きの「い」、「じ」の代わりに「ぢ」、多用される「一」、二つ以

上使われる「っ」などである。氏の以下の論点も参考になる。

- (3) a. 日本の若い女性たちは、文字のヴィジュアル的な使用の才に長けている。まる文字、ノッポ文字、ギャル文字は仲間同士のコミュニケーションを円滑に行なうための、ヴィジュアル的な道具として機能する。
b. 日本人の文字に対するこだわりの強さは日本語の表記システムの複雑さが関係している。単語の出自、単語の機能 (語幹、助詞など)、伝えたいイメージに基づいて、ひらがな・カタカナ・漢字を使い分けている。
c. 出版や音楽の業界では 80 年代にはカタカナ表記がすでに「ダサイ」ものになっていたため、より新しいイメージを演出するためにローマ字表記が多くなった。但し、「KY」に代表されるローマ字使用は、間接表現のためである。

Hudson and Sakakibara (2007) は片仮名・平仮名の「非伝統的使用」について論じている。平仮名語や漢語を片仮名で書くことにより、特別な意味やニュアンス (シャレ、斬新さ、可愛さ、くだけた感じ、深刻さ軽減など) を表現したり仲間意識を高めたりすることができる。² 例えば、「親父/オヤジ 入ってる」「きつい/キツイ (笑)」のどちらが多く使われるかグーグル検索すると、片仮名書きが俄然多い。つまり、通常と違う表記法によって特別の「情意” (emotivity) (Maynard 2002) が表わされるのである。「春咲小紅」(2008) という歌の中の「ミニミニ」「ココロ」なども情意を表す好例だと思う。最近メールに「センセー」「ヨロシク」などと書く大学生が多くなっているとの事である (柿木 2004) が、このような書き方は単なる表記法の入れ替えとは解釈されないので注意が必要である。

逆に、片仮名語を平仮名で表記する例としては「とらば一ゆ」がよく知られている。もともとは女性専用の就職・転職情報雑誌であったそうだが、柔らかいイメージの平仮名が女性用というのに合ったのであろう。因に、男女雇用機会均等法の改正 (1999 年) までは、「ピーイング」という男性専用の求人情報誌が別に存在していたとのことである (wikipedia)。ヤフージャパンのサイトの「きっず」という書き方も、

片仮名書きの「キッズ」に比べ、やさしく可愛く感じられる。また、「ごるふのこと」という「初心者のためのゴルフ情報サイト」があるが、「ごるふ」と平仮名書きにすることにより、スキルがまだ未熟、本物にまで達していないという含意が読みとれるように思う。

最近、歌詞やアーティストの名前に英語や和製英語が多用される。その最たるものは嵐の「感謝カンゲキ雨嵐」であろう。Loveday (1996)によると、そのような際に大切なのは、新しい感覚を表現し、アートとして解釈し、仲間意識を高めることであるので、言葉が間違っていたり分からなくても構わないのだそうである。

句読点にも変化が起きている。例えば、関係節の後に読点を置いた文が多くなっているようだ。修飾される名詞のすぐ前に他の修飾語

(例：形容詞)や連体詞(例：コノ、ソノ)が付いている場合は読点を置くが、そうでない場合は書かないのが普通である。「ことば・翻訳そして文化」のブログ(2007)では以下を「気になる読点の使い方」の例として挙げている。

- (4) 「ミレトス人は、まず軍事力ではギリシアのポリス中で最高の力を誇っていた、スパルタに援軍を求める。」(塩野七生著『ローマ人の物語1 ローマは一日にして成らず [上]』新潮文庫、p.179)

その他、絵文字、顔文字(例：(^_^;)、カッコ文字(例：(笑))がメールやブログによく使われる。また、「～」「ー」「!」「`」の多用、「ネオ外来語表記」「ネオ句読点」など種々あるが、秋月(2009)をご参照戴きたい。

2.3. 形態素レベル

形態素(“morpheme”)レベルではまず、見~~レ~~ル、来~~レ~~ル、食~~ベ~~ルなどのような「ら抜き」が挙げられるが、実際にはこの形は中部地方で古くから存在していたらしい(井上1998)。上記の3語は頻繁に聞かれる語の例であるが、すべての動詞に均等に現れるのではない。例えば、語のモーラ数が多くなったり、改まった語の場合は言いにくい(例：?出~~か~~けれる、??教~~え~~れる、?*乗~~り~~換~~え~~れる)。³ 因に、言語学者、金水敏教授の“SK’s Linguistics”というサイトに行くと、「ニュース字幕の「ら抜き」」(2010)というタイトルのブログがある。例文

(5) はサイトからの引用である。氏は「口頭表現ではもはや標準的と言ってもいいほど広まっていますが、報道番組の字幕ではかなりめずらしいのではないのでしょうか」と書いておられる。

- (5) めがねをかけることによって立体映像が見れる

「歌~~わ~~させていただきます」に代表される「~~さ~~入れ」という現象もある(北原2005)。陣内(1998)が言うように、この例のように改まった文ほど気にならず、「?先に歌~~わ~~させて!」などのようにくだけた文では受容度が下がる。筆者には、スで終わる動詞の場合も変に聞こえる(例：*出~~さ~~せていただきます、話~~さ~~せていただきます)。「ら抜き」も「~~さ~~入れ」も完全に浸透しているとは言えないということであろう。その外、「か抜き」という現象もある。疑問文の最後の助詞「か」を抜いた文のことである(例：行きます?)。井上(1998:149)によると、これは「広い意味での敬語、ことばづかいの丁寧さについての配慮による」。しかし、親近感も感じられるので、目上など心理的距離を感じる(べき)相手には使うのを控えた方が安全であると筆者には思える。

「～ません」の代わりに「～ないです」は若者を中心に広く普及している(例：分~~ら~~ないです)。「私って朝、苦手じゃないですか」の類の文では、すべての年代を通じて大多数がマセンではなくジャナイを使う(文化庁1999)。

「自分しか知らないことを言って、あとに文を続けるときに、下降調で言う」この種の文は、「文脈によっては押しつけがましい」(井上1998:150-151)。しかし、言語学者の加藤重広氏は、最近の若い人たちが「私って～じゃないですか」と言う場合は「遠まわしに自分のことを伝える、ある意味謙譲表現のようなもの」と解釈される(「ことばおじさんの気になることば：何となく不愉快になることば」2010)。

陳謝の「申し訳ありません」と「申し訳ないです」とを比べると、前者の方が丁寧に聞こえる。過去形でも「申し訳ありませんでした」は良いが「申し訳なかったです」はさらに丁寧度が下がる。使用の制限は誘いの文だとより明白である。「これから飲みに行きませんか?」は自然だが「*これから飲みに行かないですか?」とは言わない(田野村1994)。言語行為(スピーチアクト)によって使用制限が左右される一例である。Hudson(2008)にも述べたが、宮部

みゆきの『理由』(1998)という小説にはナイドスが非常に多い。にも関わらず、後書き(pp. 572-573)にはマセンのみが使われている。試しに、それらをナイドスに言い換えてみると、ぶっきらぼう聞こえ、不適當である。

- (6) 本作品はフィクションであり、登場する人物、地名、団体名等は、実在するものではありません(??ないです)。
... 長編小説は、作者の力だけで成立するものではありません(??ないです)。

次に略語に目を移すと、従来は4モーラが主流だったのだが、昨今は3モーラの略語が増えている。

- (7) アクセ、エンタ、エステ、コスメ、マクド、ケンタ、スタバ、ブラビ...
Cf. マスコミ、リモコン、カラオケ、カーナビ、スケボー、ゲーセン...

その他の現象としては、「人間以外にもタチを付けて複数を示す」ようになったことである(井上 2006)。もともとは「私たち」「田中さんたち」のように人間を表す名詞に付く接尾辞で、童話などで擬人化した場合は動物や植物などにも使われる。しかし、牧野(2007)によると、最近では「鯉たち」「雲たち」のようにかなり広範囲に使われており、話者/書き手が共感をもって関わる対象ならタチが使える。前述の秋月(2009:247)に「マルに代わる記号たち」という題の節がある。単に複数を表すのだったら、「記号の色々」などと言えば良い。敢えてタチを使っているのは氏が「記号」に共感を覚えるからなのであろうか。

以上、形態素関係の現象を見て来たが、新しい形・用法の背景は様々である。労力削減の「ら抜き」、丁寧配慮の「か抜き」、間違いに端を発する「さ入れ」、斬新さをねらった3モーラ略語などと考えられるが、タチの場合はどうなのか興味深い問題である。

2.4. 語彙レベル

語彙レベルでは「東京新方言」というのがある。井上(2007)によると、「新方言」とは「(1)若い人が(2)くだけた場面で使う(3)標準語にない言い方」である。「むかつく」(西日本)「うざい」(多摩地方)「違かった」(東北南

部)「〜っしょ」(北海道)など、各地の方言が東京に入り、全国へ広まる傾向を持つと言う。⁴新しい用法の例としてはフツーという語がある。「ことばおじさんの気になることば:フツーに美味しい?」(2004)というブログには若者語における程度を表す副詞の説明がある。

- (8) 「すごく→かなり・意外に→結構・多少→フツーに(幅がある)→多少…」と減少し、「意外に」はレベルが高めで、「多少」も通常の使い方よりレベルが高く「結構」と同じレベルで使う時がある。

ことばおじさんが歌う「これってホメことば?」(2006)には「フツーに」の外、「なにげに」「〜っすね」「めっちゃ」「やばい」などが出て来る。

接続詞では「なので」が面白い。浅見(1964:295-297)によると、接続助詞(附属語)のノデとカラの相違は以下の通りである。前件が原因・理由、後件が結果の関係にあることが「だれの目にも当然と思われるような場合」にはノデ、その関係が「話し手の主観的判断」の場合にはカラで示され、一般に「ノデのほうが丁寧だ」と感じられる。接続詞(自立語)のナノデとダカラの差異は、これに通じる部分もあるが、当てはまらない部分もある。矢澤

(2004:44-46)はナノデについて以下のように言っている:「インターネットで検索すると用例がヒットするが、小説や新聞のデータで検索するとほとんどヒットしない。つまり、話し言葉では徐々に使われてきているが、文章語としてはまだ定着していない」⁵ダカラでは理由を語り押しつける感じがするが、デスクラでは畏まり過ぎるか気取り過ぎるというので、ナノデの出番になったのだろう。ナノデはダカラに比べると「柔らかく聞こえ、女性が好んで使う」らしいが、⁶これは語頭の音にも関係するのではないかと思う。Makino and Tsutsui(1986)によると、/n/の音は密着した感じがし、未練などの「思い入れ(“attachment”)」が表わされるのに対し、/k/は硬く冷たい響きがある。

その他、野口(2004:23)は『かなり気がかりな日本語』で助数詞が消えつつあることを指摘している。(9)は大学生の話し方の例である。

- (9) a. A: 何階ですか。
B: ろく。
b. A: 今日って、じゅうきゅう?

- B: ううん、にじゅう。(日付の話)
 c. A: お兄さんといくつちがうの?
 B: いっこ上。[アクセントは「にっこりと」同様、低高低]

これに対し、「外国人学習者が「日付の二十四日を『にじゅうよんにち』『にじゅうよにち』『にじゅうしにち』などと発音して日本語教員にたしなめられている」(p. 23) のも事実である。野口は(2004:24) 助数詞の簡略化も観察している。つまり、「一試合」「一字」と同じように、今では「一入院」などと言う人もいるとのことである。どちらの現象も広く普及すれば学習者にとってはかなり楽になるであろう。

2.5. 語用レベル

日本語の語用で大きな位置を占めるのは敬語である。『敬語の指針』(文化審議会国語分科会 2007) が発表され、従来3種(尊敬語、謙讓語、丁寧語) だった分類が5種類(尊敬語、謙讓語、丁寧語、美化語) に細分された。敬語は日本人にも難しい(文化庁 2006, 2007, 2008; Inoue 1979)。石野(1986)によると、敬語の「乱れ」には2種類ある: ①「敬語を使うか使わないか、またどの程度に使うかの基準が混乱している」、②「敬語のカタチが混乱している」。①は敬語を使うべき相手に使わなかったり、使わなくてもいい相手に使いすぎるという類で、②は「お持ちになりますか」と尊敬語で言うべきところを「お持ちしますか」と謙讓語で言うような場合である。②は「誤用」と看做されるが、①は人によって解釈が違うようである。最近「こちら～になります」という言い方がよく話題に上るが、「～デスよりも丁寧な言い方をしようとして、～デゴザイマスの代わりに用いられる」(北原 2004:33) とのことである。丁寧標識としての謙讓語の使用についてはハドソン(1999)をご覧になって戴きたい。

敬語については色々なサイトで論議されている。例(10)は「ことば・翻訳そして文化: バスの車内で見た敬語の誤用例」(2007) のブログであるが、解説が簡潔明瞭だ。

- (10) この席をご利用される際は、足元に十分ご注意ください。
 <解説> 「ご利用」という言い方をすれば、その後ろに来るべきものは「される」ではなく「になる」です。つまり、「ご利用

用になる」とするのが適切です。一方、「～される」という形の敬語を使いたくないならば、「ご利用」の「ご」を取り去って「利用される」と言うべきところです。

特に若者は敬語が苦手で、素材敬語(尊敬語・謙讓語)を使わず、対者敬語(デス・マス)だけで済ませる場合が多い(山口 1995)。野口(2004:29-31) が調べたところ、講義中に聞き取れない部分があり、授業終了後に依頼する際の文には(11a)-(11c)がある。

- (11) a. すみませんが、先ほど、何とおっしゃったんですか。もう一度言っていただけませんか。
 b. すいません。さっき、何て言ったんですか。もう一回言ってください。
 c. ねえ、さっき、何て言ったの? もう一回言って。

例(11a)は素材敬語を使った敬体(デス・マス)の文、(11b)は敬体だが、素材敬語なしの文、(11c)は常体(ダ・ル)の文で、所謂「タメ口」である。最も多いパターンは(11b)で、次が(11c)だそうである。

一方、敬語の過剰使用も長年指摘されている(石野 1986; 大石 1975; 北原 2005; 辻村 1986; 山口 2007)。例文(12)は野口(2009:2-7)の『バカ丁寧化する日本語』からの引用である。

- (12) a. 皆様にワタクシの政策をお訴えさせていただきたく…
 b. お宅様は六歳までの小さなお子様のいらっしゃるご家庭でいらっしゃいましたか。…では、これで、お電話のほう、切らせていただきます。

筆者の場合は、非母語話者の大学生が素材敬語、特に謙讓語を使い過ぎると最近感じていた。そこで、日本人の同年代の若者はそれほど使わないだろうとの仮説のもと、2007年に日本の大学5校で学生・教授間の会話データをビデオ収録した。⁷ 母語話者の調査協力者は、学生15名(学部生8, 院生7)、教授7名である。調査の目的の一つは、学生が(自分の或いは初対面の)教授と話す時にどのような話し方をし、どのぐらい敬語を使うのか、また敬語についてどう思っているのかについて実態を把握することによ

り、米国での年代相応の日本語教育への示唆を得ることである。調査の結果、尊敬語としては(ラ)レルと(テ)イラッシュが頻繁に使われ、「お～になる」の形、「なさる」などの特別表現はほとんど使われないことが分かった。また、謙譲語は自己紹介時の「～と申します」(3件、うち2件は同一話者)、入室・退室時の「失礼致します」(2件、同一話者)以外はほぼ皆無である。⁸ 特に興味深かったのは、非母語話者の学生は7人中の6人が「～と申します」を使って名前を言ったのに対し、母語話者の学生は「～と申します」を使ったのは10人中の2人に過ぎず、あとは「～です」で済ませていたことである。対者敬語に関する結果としては、2人(42.6%, 71.7%)を除いた他の学生はすべて発話文の大多数(86-100%)に敬体を使った。常体は「え?何を訊いたらいいんだらう」のような自分向けの文に多かった。また、7人の学生に部活やアルバイト先での先輩との話し方を訊き、具体的に説明してもらったところ、尊敬語などは使わないが、とりあえずデス・マスを使うということであった。つまり、少なくとも今回の調査協力者に関しては、(13)の指摘(秋月2005:113)とは異なる結果が得られたわけである。

- (13) 一般に、今日の若い世代の人々は、礼儀や敬意を重んじるコミュニケーション・スタイルよりも、親しさや共通感覚を重んじるコミュニケーション・スタイルを志向している。「年上や上司でも親しくなればタメ語」という感覚がこれを表している。

個々人の話し方は、自分の持つアイデンティティ、及び自分が相手にどういう人間に見られたいかという気持ちを反映している。それ故、十人十色で個人差が出るのは当然であろう。(14)に引用した野口(2004:31)の説明に筆者は同感である。

- (14) 敬語を知っているかどうか、また使えるかどうかということについては、大人もそうだが、十八歳の大学一年生でも、個人差がきわめて大きい。育った環境が影響することは否定できないが、たとえ家庭や地域や学校で敬語を身につける機会に恵まれなかったとしても、本人の自覚と関心さえあれば、覚えることは可能だ。

その外、若者の語用の特色としては「とか」など「ぼかし言葉」が多いと言われている(文化庁1999)。これは「知識の不足/発話内容に自信がない」(Lauwereyns 2000, 2002)、「相手を傷つけない」(野口2004)などの理由からである。「コーヒーのほうをお持ちしました」の「ほう」もぼかし表現であるが、「必要以上のぼかし表現はどこかに<逃げ>の姿勢が感じられるとともに、意志の疎通を妨げる要因ともなりかねないので、注意が必要」である(北原2004:28)。

3. 日本語教育への含み

3.1. 学習者に伝えたいこと

学習者は特に敬語に関して神経質になる傾向がある。単語や文法の間違いとは異なり、相手の感情を害する可能性が多いからである(Niyekawa-Howard 1991)。大学生の学習者に伝えたい事を(15a)-(15e)に列挙する。

- (15) a. 学生として目上と話す時はデス・マスを使っていけばたい安全である。
 b. 謙譲語(オ～スル形、マイルなどの特別表現)は、聞いて分かればよく、使う必要はない。
 c. 尊敬語は、(ラ)レルと(テ)イラッシュで充分である。オ～ニナルの形やメシアガルなどの特別表現は分かれば良い。
 d. 日本(特に大企業)で働く場合、かなりの程度の敬語運用能力が必要になるが、母語話者も入社時に電話の受け応えなど敬語使用の研修があるので、心配は無用。マニュアル敬語を熟知している母語話者の若者でも応用ができない場合が多く、学習者の方が敬語の知識があるということが多々ある(野口2009)。
 e. 最近留学生を雇う企業が増えているようだが、⁹ 普通は日本語能力試験の1級(か少なくとも2級)に合格している事が前提とされるので、まずはその勉強に励むべき。但し、日本で就職活動をする場合、面接試験である程度の素材敬語は必要になる。

3.2. 日本語の先生方に伝えたいこと

日本語の新しい特色をすべて学習者に教える必要はない。しかし、例えば流行語の場合、日本に留学の経験のある上級者が使ったり、或いは他の学生が教師に訊くという可能性は大いにある。そういう言葉は目上や疎遠の人と話す時には使わないようにとアドバイスをし、使うことによりどのようなセルフイメージを投影しているのかを説明することが重要である。ある表現を、誰に使っても構わないのか、使ってはいけないのか、いつ使うべきなのかなどという知識を与えることは教師にしかできない。一般の日本人は不快な思いをしても何も言わないのが普通であるから、これこそ教師の任務と言える。野口 (2004) も言うように、「外国人学習者が日本語のコミュニケーションにおいて不利益をこうむらないようにするのが日本語教育の目的の一つ」なのである。

話し方には個人差が大きい。その要因は、年齢、役柄、ジェンダー、育った環境、話す状況、話題、傍観者など色々ある。また、話し手が当該の状況をどのように把握しているのかも重要である(例:仲間うちのおしゃべり、知人との歓談、改まった状況での目上との用談)。そして、一つの会話の中でもその見解が絶えず変動し、敬体・常体のシフトが頻繁に起こる。相手が同じでも話し方が様々に変わるということは、話し手・聞き手の関係が「静的」ではなく「動的」であることを表す。つまり、言語は行動(アクション)であり、話し方は話者のその時々アイデンティティの選択を反映している。非母語話者の場合も、言語運用能力が高くなればなるほど、言葉の選択が彼らのアイデンティティを反映していると思われる。例えば、敬語を適度に使う場合は「教養のある、育ちの良い、社会的な」人間と見られ、使い過ぎの場合は「慇懃無礼」と思われる。このようなことも学習者に指摘しなければならない。そして、敬語に限らないが、練習は必ずディスコースレベルですることが望ましい。

教師としては、色々なオプションを持った学習者を育てることが理想だと思う。一つの事を表現するにも多様な言い方があり、各々の言い方が異なった意味合いを持っているということを学習者に教える。そして、どのオプションを選ぶかは学習者が自分の希望するアイデンティティに即して決めれば良い。教師にできること

は、彼らが確かな情報に基づいて判断ができるようにすることである。

4. おわりに

日本語の新しい特色の基本を知るには、以下の書籍が分かりやすく面白い: 井上 (1998)、陣内 (1998)、北原 (2004)、北原 (2005)、北原 (2007)、野口 (2004)、野口 (1997)、山口 (2007)。敬語に関する書籍は専門書、非専門書が巷に溢れているが、井上 (1999a)、菊池 (2003)、国立国語研究所 (2008) などが手軽であろう。『敬語の指針』についての説明は『日本語学』27-2 (2008) の特集が参考になる。学習者用にもたくさんあるが、金子ほか (2006) は他と趣向が違って面白く、職場での敬語を勉強するためのコンパクトな本としては金井 (2007) が良いように思う。但し、母語話者用ですべて日本語で書いてあるため、学習者は教師の助けが必要かもしれない。TOP ランゲージ (2006) はCD付きで、しかもある程度英語の説明もあるので、併せて用いると良いと思う。

現代日本語の変化、日本人の言語意識に関する情報を得るには、毎年アップデートされる、文化庁の『国語に関する世論調査』の結果について」のサイトが最も手取り早い。また、国立国語研究所の「国語研の窓」にも役立つ情報が掲載されている。新語・流行語関係では「新語探検」「ユーキャン新語・流行語大賞」「日本語俗語辞書」などのサイトが便利である。その他、上記本文で引用した文献・サイト、及び引用しなかったが役に立つであろうと思われる文献若干は最後の「参考文献」に入れた。筆者の Links for Japanese Language Students and Teachers のサイトも参考になるかもしれない。当然ながら筆者の持つ情報は限られているので、良い文献やウェブサイトがあったら是非お知らせ願いたい。

「空腹の人に魚を上げてもその場しのぎにしかならないが、釣りの仕方を教えたなら後々まで自分で空腹を満たして生きて行くことができる」というたとえ話がある。日本語学習者に教師がすべてを教える事は不可能であるしその必要もない。大切なのは効果的な勉強方法や役に立つリソース(参考書、ビデオ、ウェブサイトなど)を教え、学習者が独り立ちできるように、また生涯学習者になるように導くことである。同様に、昨今の日本語の新しい現象を網羅することは不可能である。本稿では筆者が特に興味を持

つ事柄に焦点を当て、関連のリソースを紹介した。読者の先生方のお役に立てば幸いである。

注

1. 大石 (1975:17) は日本語の「乱れ」を嘆く1906年の新聞記事を紹介している。
2. 「広島」を「ヒロシマ」と書いて特別の意味を表したり言語学の論文で「こと」を「コト」と書いて用法を論じる場合などの片仮名書きは当該の使用法とは違う。
3. 語や文の前に付いたアステリスク (*) は「非文法的」、疑問符 (?) は「言えるかもしれないが気になる」の意味。
4. 前述の「か抜き」はもともとは西日本の方言(井上1998:149)。
5. ブログの言葉は話し言葉に近いものが多く、「文章語」には含まれない。
6. 「ことばおじさんの気になることば：なんでなのでなの？」(2004/10/04)
7. 調査全体ではこれに加えて非母語話者の学生11名と母語話者の教授が1人参加した。調査の詳細は Hudson, forthcoming を参照。
8. 「お願いします」は「お～する」の形になっているが、イディオムなので、ここでは謙讓語と看做していない。
9. 「外国人留学生ニッポン就職事情」tokyomxビデオ(2008/06/17)

参考文献

- 相澤正夫 (2001) 「アクセントの平板化」国立国語研究所「国語研の窓」第9号
http://www.kokken.go.jp/kanko/kokken_mado_mt/09/04/03.pdf
- 秋月高太郎 (2009) 『日本語ヴィジュアル系-あたらしいにほんごのかきかた』角川書店
- 秋月高太郎 (2005) 『ありえない日本語』筑摩書房
- 浅見 徹「カラとノデ」(1964) 時枝誠記・遠藤嘉基監修『講座現代語第六巻：口語文法の問題点』293-298 明治書院
- 石野博史 (1986) 「敬語の乱れ：語用の観点から」文化庁編, 44-54.
- 井上史雄・荻野綱男・秋月高太郎 (2007) 『デジタル社会の日本語作法』岩波書店
- 井上史雄・鎌水兼貴編 (2002) 『辞典<新しい日本語>』東洋書林

- 井上史雄 (2007) 「呼び名でわかる：東京新方言 各地の言葉が逆流」毎日新聞 2007年5月8日東京(朝刊)
[\(http://ling.exblog.jp/5556048/ にも掲載\)](http://ling.exblog.jp/5556048/)
- 井上史雄 (2006) 「日本語新表現の合理性」『日本語教育通信』2006年9月第56号
http://www.jpf.go.jp/j/japan_j/publish/tsushin/56-59_pdf/tushin56/nk56_01-03.pdf)
- 井上史雄 (1999a) 『敬語はこわくない：最新用例と基礎知識』講談社
- 井上史雄 (1999b) 「特集ワイド：新型敬語」毎日新聞 1999年11月11日(夕刊)
- 井上史雄 (1998) 『日本語ウォッチング』岩波書店
- 井上史雄 (1995) 「丁寧表現の現在：です・ますの行方」『国文学』40:14, 54-61
- 大石初太郎 (1975) 『敬語』筑摩書房
- 大野 剛・キンベリージョーンズ (2001) 「会話における認知的側面と話者間の相互作用：日本語教育への提案」南雅彦・アラム佐々木幸子編『言語学と日本語教育 II』, 181-196. くろしお出版
- 柿木重宣 (2004) 「チャレンジコーナー」『月刊言語』33(3), 112-117. 大修館
- 金井良子 (2007) 『これが正しい敬語です』中経出版
- 金子史朗ほか (2006) 『マンガで学ぶ日本語会話術』(CD付) アルク
- 金子広幸 (2006) 『にほんご敬語トレーニング』(CD付) ASK
- 亀井 肇 (2003) 『若者言葉事典』日本放送出版協会
- 菊池康人 (2003) 『敬語』講談社
- 北原保雄編 (2004) 『問題な日本語：どこがおかしい？何がおかしい？』大修館
- 北原保雄編 (2005) 『続弾！問題な日本語：何が気になる？どうして気になる？』大修館
- 北原保雄編 (2007) 『問題な日本語：その3』大修館
- 北原保雄 (2007) 『ビミョウに異なる類義語』小学館
- 北原保雄監修 (2006) 『みんなで国語辞典！これも日本語』大修館
- 金田一秀穂 (2004) 『NHK 日本語なるほど塾5月号：ようこそ！言葉の迷宮へ』
- 国立国語研究所編 (2008) 『新「ことば」シリーズ21「私たちと敬語」』

- 陣内正敬 (1998) 『日本語の現在 (いま)』アルク
- 田野村忠温 (1994) 「丁寧体の述語否定形を選択に関する計量的調査—「ません」と「ないです」」大阪外国語大学論集 11 号, 51-66.
- 『日本語学』27-2 (2008) 特集「敬語の指針を考える」明治書院
- 辻村敏樹 (1992) 『敬語論考』明治書院
- 辻村敏樹 (1986) 「敬語の適切な使い方」文化庁編, 55-68
- TOP ランゲージ編 (2006) 『実用ビジネス日本語 (新装版)』(CD 付)アルク
- 野口恵子 (2009) 『バカ丁寧化する日本語—敬語コミュニケーションの行方』光文社
- 野口恵子 (2004) 『かなり気がかりな日本語』集英社
- ハドソン遠藤陸子 (1999) 「丁寧標識としての謙讓動詞」南雅彦・アラム佐々木幸子編『言語学と日本語教育 I』, 259-274. くろしお出版
- 文化審議会国語分科会 (2007) 『敬語の指針：答申案』
http://www.bunka.go.jp/1kokugo/keigo_shouiinkai190115_siryuu.html
- 文化庁編 (1986) 『「ことば」シリーズ 24：続敬語』大蔵省印刷局
- 文化庁 (1999, 2006, 2007, 2008) 平成 11, 17, 18, 19 年度「『国語に関する世論調査』の結果について」
http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/yoronchousa/h11/kekka.html,
…/yoronchousa/h17/kekka.html,
…/yoronchousa/h18/kekka.html,
…/yoronchousa/h19/kekka.html
- 文化庁文化部国語課 (1999) 世論調査報告書：国語に関する世論調査
- 牧野成一 (2007) 「認知世界の窓としての日本語の複数表示—タチ」久野暁・牧野成一・スーザンG ストラウス編『言語学の諸相』, 121-130.
- 矢澤真人「なので」(2004) 北原保雄編『問題な日本語』, 293-298. 大修館
- 山口仲美 (2007) 『若者言葉に耳をすませば』講談社
- 山口仲美 (1995) 「尊敬表現の現在：衰退の流れの中で」『国文学』40:14, 38-44.
- 米川明彦 (1998) 『若者語を科学する』明治書店
- Cook, H. (2008) *Socializing Identities through Speech style: Learners of Japanese as a Foreign Language*. Bristol, UK: Multilingual Matters.
- Hadley, A. Omaggio. (1993) *Teaching Language in Context*. Boston: Heinle & Heinle.
- Hudson, M. Endo. (Forthcoming) Student *Kêgo* ('Honorifics') Usage in Conversations with Professors.
- Hudson, M. Endo (2008) Riyuu 'Reason' for *nai desu* and other semi-polite forms. In K. Jones & T. Ono (Eds.), *Style Shifting in Japanese*, 131-159. Amsterdam: John Benjamins.
- Hudson, M. Endo, Y. Sakakibara. (2007) 'Emotivity of nontraditional katakana and hiragana usage in Japanese.' In M. Minami (Ed.), *Applying Theory and Research to Learning Japanese as a Foreign Language*, 180-193. Cambridge, UK: Cambridge Scholars Publishing
- Inoue, K. (1979) Japanese: A story of language and people. In Shopen, T. (Ed.), *Languages and their speakers*. Cambridge, MA: Winthrop Publishers.
- Lauwereyns, S. (2002) Hedges in Japanese conversation: The influence of age, sex, and formality. *Language Variation and Change* 14, 239-259.
- Lauwereyns, S. (2000) Hedges in Japanese spoken discourse: A comparison between younger and older speakers. Ph.D. Dissertation. Michigan State University.
- Loveday, L. J. (1996) *Language contact in Japan: A socio-linguistic history*. Oxford: Clarendon Press.
- Maynard, S. K. (2002) *Linguistic emotivity: Centrality of place, the topic-comment dynamic, and an ideology of pathos in Japanese discourse*. Amsterdam: John Benjamins.
- Makino, S., Tsutsui, M. (1986) *A dictionary of basic Japanese grammar*. Tokyo: Japan Times.
- Niyekawa, A. M. (1991) *Minimum Essential Politeness*. Tokyo: Kodansha International.

引用サイト・ビデオ

「外国人留学生ニッポン就職事情」Tokyo MX ニュース (2008/06/17)

http://www.youtube.com/watch?v=ZT5fWPZTIQA&feature=player_embedded

「カッコ文字辞典」

<http://www10.plala.or.jp/hakoten/com/parenthesis.html>

「金水敏のホームページ」SK's Linguistics

「ニュース字幕の“ら抜き”」

(2010/01/07)

<http://skinsui.cocolog-nifty.com/linguistics/2010/01/post-a562.html>

「国語研の窓」国立国語研究所

http://www.kokken.go.jp/kanko/kokken_mado_mt/09/04/03.pdf

「国語に関する世論調査」文化庁

http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/yonchousa/index.html

「ことばおじさんが歌う ♪ 『これってホメことば?』 ♪」毎日新聞 2006年9月20日東京(夕刊)

<http://video.google.com/videoplay?docid=2372662805829410909#>

「ことばおじさんの気になることば」

『何となく不愉快になることば』

(2010/08/23)

<http://www.nhk.or.jp/kininaru-blog/59079.html>

『なんでなのでのなの?』(2004/10/04)

<http://www.nhk.or.jp/room/kininaru/2004/10/1008.html>

『フツーにおいしい?』(2004/10/15)

<http://www.nhk.or.jp/room/kininaru/2004/10/1015.html>

「ことば・翻訳そして文化」

<http://www.hokushin-media.com/kotoba/minibbs.cgi>

『気になる読点の使い方』(2007/05/17 司馬拓也)

『バスの車内で見た敬語の誤用例』

(2007/05/12 司馬拓也)

「ごるふのこと」

<http://homepage2.nifty.com/golfnokoto/>

「新語探検」<http://dic.yahoo.co.jp/newword/>

「とらばーゆ」<http://ja.wikipedia.org/wiki/とらばーゆ>

「ナイトジャーナル：100年後の日本語はこうなる」NHK (1993)

「日本語教育通信」国際交流基金

<http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/tsushin/index.html>

「日本語俗語辞書」<http://zokugo-dict.com/38yo/yokores.htm>

「みんなの教材サイト」国際交流基金日本語国際センター

<http://minnanokyozei.jp/kyozai/>

「Yahoo! きつず」<http://kids.yahoo.co.jp/>
矢野顕子「春先小紅」(2008)

<http://www.youtube.com/watch?v=zYfzsei5t10&feature=related>

「ユーキャン新語・流行語大賞」

<http://singo.jiyu.co.jp/>

‘Links for Japanese Language Students and Teachers’

<http://www.msu.edu/~endo/links.html>